子どもたちの未来と被ばくを考える会

発行日 2022 年 1 月 25 日事務所:和歌山市三番丁 6 番地三番丁ビル 4 階金原法律事務所
http://kodomomiraikibou2012.seesaa.net/　連絡先・事務局：TEL:073-451-5960（松浦）

東京電力福島原発事故→12年目に

皆様あけましておめでとうございます。

本年もどうぞよろしくお願いいたします。

昨年 1 年間は、新たな仕事に就き、日々追われて、なかなか会の活動を進めることができませんでした。

一方、仕事で毎日たくさんの人と出会い、一人ひとりとゆっくり話す機会はあるのですが、そこで話されるのは、コロナと天気と芸能ニュース。たまにオリンピックや政治の話はてでくるものの原発が話題になることはまずありません。

原発の話をするのがタブーなのか、原発について考えることがないのか、おそらくその両方だとは思います。SDGs や環境問題を語るのに心の敷居がないように、原発に関しても私たちが普段の生活の中でさらりと話せることが二度と原発事故を起こさないための一歩だと思うので、この会含めて各地で活動している原発反対の動きや発信がそのような社会をつくるきっかけに繋がればと願います。

３.11 当時赤ちゃんだった娘も、今年で 12 歳。だいぶ大人の話すことを理解し、自分で考えられる歳になってきました。原発の賛否を子どもに押し付けることはしませんが、原発事故が起きれば放射能汚染され被ばくすることと、汚染と被ばくがもたらす影響については、機会を見つけて伝えていきたいと考えています。

「社会は自分たちがつくっていくのだ」という意識と、「もし事故が起きればどうなるか」という想像力を働かせられるよう、この会や様々な人との出会いの中で私自身学んだことを、今度は子どもたちに伝えていきたいと思います。　　（ 芝野絢子 ）

新年に寄せて

松永久視子

　みなさま、ご無沙汰しております。お元気でいらっしゃいますか？
　昨今のコロナ事情により、なかなか集まりを持ったり、学習会をしたりは出来ていませんね。
　今回、ニュースレター用に何か原稿を…というメールが発信された時には、「さて、何を書こうか…」と結構長い時間、思案してしまいました。何故なら、「原発」「放射能」「被ばく」「避難」…こんなテーマについて何も考えていなかったからです。

　福島の原発事故から、あっという間に時間がたち、もう10年です。
　当初、放射能による大気汚染が心配だったり、放射能汚染された食べ物を食べたくないと思ったり、がれきの焼却を受け入れたくなかったり…自分の、また家族の健康を守りたくて必死になりました。
　また、色んなことを知っていくにつれ、「自分たち家族だけを守ったらいいわけじゃない。誰一人、放射能によって不利益を被ってはいけない」「やっぱり原発は最終終着地の決まっていない負の産物で、これ以上推進してはいけない発電方法だ」という思いを強くし、「原発反対」そう心に誓いました。
　今も、その気持ちは一ミリも変わっていません。テレビで特集があれば観、雑誌で特集があれば購入して読み、気になるニュースはチェックしています。
　でも、家族や友人との会話の中で話題に上ることは本当になくなりました。特に話さない、別に話さない、わざわざ話題にしない。私の日常の中で「原発反対」は、人と共有することではなく、私自身の個人的なことになってしまいました。時間の流れ、時代の流れによるものかもしれません。私だけではなく、みなさんも、もしかしたらそんな傾向にあるかもしれません。

　夏、オリンピック番組の裏で、福島や被災地の特集番組もいくつかありました。今もまだ帰還困難区域があり、一応帰れることになっている地域も人の営みは戻らず、町は村は侵食する植物や野生動物に飲み込まれていっています。また、新しく別の地で暮らし始めた方々も、それぞれの苦悩を背負い、今もまだ苦しんでおられます。何にも終わってはいない。ただ、見えなくなっているだけ。
　今、「フクシマ」は見ようとしなければ見えないものになっています。普通に暮らしていたらスルーしてしまえる、もう終わったこと。でも、本当は何にも終わっていない、何一つ解決していない。私たちは未来にツケを回し、子どもたちに課題を残しているだけなのです。
　見ましょう、フクシマを。見ましょう、現実を。
そう思いを新たにした年頭でした。今年も、思いを同じくして、どうぞご一緒に歩んでください。

家にいて思うこと

もともと出不精で全く行動力なくご迷惑をおかけしていましたが、高齢になっての体調不良とコロナ自粛が重なり家に閉じこもっています。申し訳なく思います。原発のことについていろいろ思いめぐらしていますが、二つのことについて記してみたいと思います。

一つは、フクシマ事故による健康面への影響はすさまじいのではないか。全く全貌があきらかになっていないのではないかということ。事故時フクイチ周辺に居住されていて、ほとんど情報を与えられないまま逃げまどい、今も避難生活をされている方々、事故後のフクイチで事故処理の仕事をされている方々（のべ数は果てしないのでは)、地震災害救援と駆り出され活動した自衛隊員（事故はおきないが国是だったから、一般の隊員にはおそらく事前に放射線の教育は全くなされていなかったろう)、事故後１１年を迎える今、健康を保持されている方の割合はどのくらいでしょうか。お亡くなりになった方も相当数おられるのでは。若者に甲状腺がんが次々みつかったり（とても大きなことなのに日本全体の問題意識になっていない)、胃がんの方が福島県は罹患率が高いなどは数字としてとらえられていますが、何らかの形で体に放射線被害をうけた人は無数におられると思います。

さらには、福島県に近い、首都圏も含めた都県の方々、汚染された食品を知らずに口にした方々・・・。すこし離れたところに在住の方々の場合、健康被害がでても、急性で同時多発でないかぎり他の要因による健康悪化との見分けがつきにくく、どこまでが放射線被害かわかりません。全く資料的根拠がないのですが、私には、すくなくとも首都圏などでも年間１万人に１人の割で亡くなっているくらいの放射線被害がでているのではないかと思えます。１万人に１人だと、「あの健康だった人が意外だが、風邪でもこじらせたのか」と放射線被曝との因果関係に思いをはせる人はいません。茨城県も含めた首都圏方面の人口を３０００万人とすると、年１万人に１人の計算は年３，０００人、ここ１０年で３万人となりますか。これらの方々はフクイチ事故がなければ元気に暮らしておられたのに・・・。放射線の飛び方も均一でなく、事故時にどのような生活をしておられたかにより、一つの都市でも被曝の状況は大きくかわり、人々の移動もはげしく、とてもとても因果関係は立証できない状況で、多数の被害があってもうやむやにされてしまい、歴史の本にも記されなくなってしまう感じです。

二つ目に思っていること。職場の引き継ぎや意識の持続について。フクイチでは凍土壁がこわれたり汚染水の海洋投棄が画策されたりしているようですが、事故時から１０年以上たち、東電社員もかなり入れ替わっているのではないでしょうか。２０年たつと、事故を知らない人がかなりの割合になると思います。JR 西日本では２００５年福知山線事故後入社の社員が半数をこしたそうです。廃炉を完了し、使用済み核燃料の処理（できないのでは）を終えるまで何十年かかるのでしょう。そんな長いスパンで職場の引き継ぎや意識の持続をやっていけるのでしょうか。われらの関西電力でも、美浜事故のときの発電所メンバーはどのくらい在籍しているのでしょうか（そんななかの運転再開はこわいです)。

そんなこんなとりとめのないことを考えながら毎日をおくっています。行動されている方々には申し訳ない思いでいっぱいです。

（園部俊治）

甲状腺がん子ども基金をめぐって

2011 年 3 月 11 日の東京電力福島第一原発事故では大量の放射性物質が放出されました。なかでもヨウ素 131（半減期約 8 日）、ヨウ素 133（半減期約 21 時間）は、原子力発電所の事故では最も注目される放射性核種です。ヨウ素は、甲状腺（ヒトの咽喉元にあります）に集まる特徴があるために、甲状腺被ばくによる甲状腺機能障害が発生し、チェルノブイル原子力発電所の事故では幼児に多くの甲状腺がんを引き起こしました。概して、被ばく年齢が若いほど感受性が高くリスクは大きくなると考えられ、「福島県民健康調査」などでも小児甲状腺がんが注目を集めてきました。

「3・11 甲状腺がん子ども基金」https://www.311kikin.org は、福島原発事故以降に甲状腺がんと診断された子どもとその家族を支援することを目的に、設立された NPO 法人です。『2020 年度活動報告書』をもとに、この基金の活動状況をお知らせします。

１）2016 年 12 月より開始された療養費給付事業「手のひらサポート」は、甲状腺がんと診断された方のうち、事故当時 18 歳以下で福島県をはじめ 16 都県に住んでいた方を対象として、経済支援をおこなうものです。地域は国の発表した放射線拡散シミュレーション図に基づきます。これまで支援した方は第 1 期～第 5 期の合計で 176 人（うち福島県在住 114 人）、給付金額は約 3400 万円となります。給付は甲状腺がんと診断された方 1 人につき 10 万円を基本とし、再発転移による再手術への給付や交通通院費、入院出産への支援金など、支援は拡充されてきています。めざすところは、本人と家族の不安や悩みにこたえ QOL（生活の質）を向上させることにあります。

２）原発事故から 10 年を迎え、当事者への 2 回目のアンケートを行いました。

※1 回目は　2017questionnaire-thyroid-ultrasound.pdf (311kikin.org)

対象者は、上記「手のひらサポート」の受給者 176 人。うち回答者は 105 人（本人 72 人、保護者 33 人）で、回収率は福島県 61%、福島県外 56%となります。

アンケートの結果、①体調は良好または普通と答える人が殆どだが疲れやすさや将来への心配を抱えていること、②県民健康調査甲状腺検査をめぐって、検討委員会での患者把握の欠陥、学校での甲状腺検査の必要、甲状腺がんと原発事故との関連、「過剰診断論」への反発、などの問題があること、③表に出にくい当事者のデータから問題発見や課題解決を見出すこと、等が明らかになりました。

なおこのうち当事者の声は、オンライン・シンポジウムで発表され、参加者と対話がなされました。また報告書は、10 月発行になっています。（Web 掲載　PDF 版は無料）

甲状腺被ばくについて付け加えると、原子力事故発生時に安定ヨウ素剤を服用することにより、放射性ヨウ素の取り込みを防ぎ内部被ばくを抑える効果があります。しかし服用は適時かつ円滑に行うことが前提です。3・11 福島原発事故の時も県下に配布されていたヨウ素剤は殆ど服用されず、大きな問題となりました。もとより、ヨウ素剤は、放射能に対する万能薬などではありません。

ヨウ素剤の安定した運用のためのシステムも重要ですが、本当に安心して日々暮らすためには、再稼働を止め、原発のない社会をつくって行くことではないでしょうか。

※「子どもたちの未来と被ばくを考える会」は、当初より賛助会員（年会費一口 5000 円）となっています。また代表理事の崎山比早子さんについては、当会の講演会講師としてお招きした（2016 年 1 月）ので、ご記憶の方も多いかと思います。（梅原清子）

持続可能エネルギーを求めるために

原子力発電のことに関して言及するにはエネルギー、特に電力需要のことを抜きにしては語ることはできません。
当会は電力需要に関して原子力資料情報室の方を講師に招いて2020年2月に講演会を企画していました。しかし、コロナ感染症が流行してきたため中止せざる負えなくなりました。
私たちの活動はこれ以来、集会を持つことができず冬眠状態になっています。

一方、原子力関連事業には、福島原発事故後停止に至った原発を再稼働、除染作業で発生した汚染土壌の処理、タンクが満杯になってお手上げのフクシマ原発汚染水の処理、原発を再稼働すれば必ず使用済み核燃料が発生する、原発建屋内は保管プールが手詰まり状態、原発稼働当初からトイレのないマンションは継続、未だに核のゴミの処理法は決められていない、廃炉に向けての廃炉ビジネスの有り方、次から次に問題が山積してきていて、コロナが蔓延しようが動きを止める事はありません。しかし、何一つ住民が納得できるような解決のめどは見出されていません。

その中でも特に見逃すことのできない点は社会現象ともなっている脱炭素社会を目指すという共通認識が世界規模で合意事項になってきている点です。石炭がダメ、石油がダメ、ガスがダメ、ガソリン自動車はダメ、再生可能エネルギーは利便性に問題あり、となれば電力の需要が増えてきて、電気を作る方策として原子力発電に頼る以外にないという発想が世界各国で見え隠れしだしてきている点です。トヨタ自動車社長などはガソリン車はダメ、電気自動車オンリーとなれば電力を賄うえで原発を動かさざるを得ないようになると発言しています。

ここで、再生可能エネルギーの目玉である風力発電について若干述べさせていただきます。
和歌山県の風力発電施設近隣住民に健康被害が発生したため、風力発電のシステムについて調べたところ、2018 年度で風力発電は全国で 2253 基（3502787kw）の風車が山の尾根伝いに建てられていました。風力発電の発電能力は定格出力の約 20%なので当時、約 70 万ｋｗ/ｈの電力を供給できる能力があったことになります。東京新聞の調査によると、日本の全電力の使用量の０．６５%に当たるとの試算が出されていました。

電力会社に言わせると２%以下は停電を回避するための誤差の範囲で誤差の範囲内の電力で電力生産の調整は行わないとのことです。ですから、風力発電は二酸化炭素削減には何ら寄与していない。むしろ、建設土地を確保するために山の尾根の樹木を伐採しての道路建設など環境破壊を余儀なくされるため二酸化炭素削減に逆行していると思われます。国民は再エネ賦課金で何の役にも立たない使わない電気代を払わされているというのが実状です。

地球上で世界の人類が今以上の暮らしを求めていくとしたら、とどのつまり、二酸化炭素か放射能かどちらかを選べと二者択一を迫られる時が来ると思います。

その時慌てずに、地球上で継続して静かに暮らしたいと思う市民たちはどちらの道も選ぶことなく持続可能な第三の道を選べるように常日頃からエネルギーについての学習を積み重ねていく必要があると思います。
東京電力福島原発の事故で「絶対的不可逆的損失」を環境に与え、人間が生きていくうえで、原子力発電がエネルギーとして適しないことを証明しました。
「故きを温ねて新しきを知る」の言葉をかみしめたいと思います。　　（松浦攸吉）

2014年6月23日に第1回を行った

「憲法の破壊を許さないランチ TIME デモ」

（呼びかけ：憲法９条を守る和歌山弁護士の会）

本稿を書いている今日（２０２１年１２月７日）行われたデモで９０回目を迎えた。今日も、降り続く雨の中、５５人の市民が参加した。よく７年以上も休まずに続けてこられたものだと、主催団体の一員ながら感心する。

７年前の政治状況を記憶している方には説明の必要もないかもしれないが、デモが「憲法の破壊を許さない」と名乗ったのは、当時、第２次安倍政権が、日本国憲法の下では集団的自衛権の行使は認められないという、歴代の自民党政権（民主党政権も）が守り続けてきた憲法解釈を、本来なら憲法改正の発議を経て国民投票にはかるべき問題であるにもかかわらず、一内閣が勝手に閣議決定で変更しようとしていることに抗議し、「憲法の破壊を許さない」市民の意思をアピールしなければという切迫感にかられてスタートしたものだった。

このような経緯から、このデモは、呼びかけの当初の段階では、立憲主義を守るためのデモとしてスタートしたものであり、決して９条護憲派だけのデモではなく、実際、第１回の参加者１６０人の中には、「自分は９条は改正した方が良いと思うが、安倍政権のやり方は許せない」という人も、ごく少数ながら参加していた。

その後、いつしかデモで使われるコールの中に「憲法９条世界の宝」とか「9条を子どもに残そう」というフレーズが登場しても誰も怪しまなくなり、「憲法の破壊を許さないランチ TIME デモ」が、あたかも「９条を守るためのデモ」であるかのような外観を呈するに到った。

今日のような雨の日にも５０人を超えるそれなりの参加者があるのは、いくつもの「９条の会」の協力があればこそであり、このような推移はある種必然であったとは思う。

しかし、２０１９年から２０２０年にかけて、検察庁法に違反する東京高検検事長の定年延長や、日本学術会議法に違反する会員推薦候補６名の恣意的任命拒否など、従来では考えられもしなかったあからさまな法秩序を無視した横紙破りを政府が堂々とやってのけるという状況を目の当たりにして、「９条」だけが問題なのではない、ということを改めて認識することになったのも事実である。

実は、今日の第９０回デモのコーラーは主催団体共同代表の１人である豊田泰史弁護士が務めたのだが、いつものコールの中に、さりげなく「和歌山にＩＲカジノはいらない！」というコールを挿入しており、参加者も元気よく唱和していた。カジノ問題が憲法問題か？についてはいささか疑問もあるが、憲法が保障する人権や価値を守るために見過ごすことのできない問題が社会には多々ある訳で、そのような様々なテーマをコールの中に取り入れることはできないか、コーラーも弁護士だけではなく、その回のテーマに相応しい人にお願いしてはどうか、などということを夢想してりしている（まだ夢想の段階で、主催団体の内部で問題提起もしていないが）。

もしもこの夢想が実現に一歩踏み出せば、放射能から逃れるための「避難の権利」を保障せよというコールが、「憲法の破壊を許さないランチ TIME デモ」の中で聞ける時が来るかもしれないというようなことを思ったりした１２月７日であった。　（金原徹雄）

2022年3月11日に寄せて

　ここ最近、日本では地震が多くなり、南海トラフ地震の起きる確率80～90%が90%以上に変更された。東日本大震災、レベル7の福島原発事故から11年、私たちは大事故の教訓を生かしているだろうか。

核燃料が溶け落ちて、再臨界しないように水を入れて冷やし続けるしかない福島原発１～３号機。
たまる一方のアルプス処理水を2023年に海水で薄めて沖合1キロメートルの太平洋に流すことを決めた政府。
　その処理水にはベータ線核種の放射性物質があるのに、ガンマ線しか計測できない空間線量計で計測して見せて、見学に入った高校生たちに「処理水は安全だ」とアピールすることの、どこに安全があるのか。
原発建屋の外に、命を脅かすほどのアルファ線核種の高濃度汚染があったことを10年隠してきた東電。
11年経ってもなお原発事故の検証は終わらない。
廃炉作業ではトラブルも無縁でなく毎日被曝しながら作業をして下さる作業員さんたち、普段はその存在を忘れられている。
昨年、下請けの作業員さんが熱傷３度の火傷を負った事故があっても、全国ニュースで大きく取り上げられなかったのは異常だと思う。
　一方でメディアは福島は復興したと前面に押し出してくる。人々に笑顔が戻ってきたと。
　空間線量だけを測って、安全だ、復興を妨げているのは風評被害だ、と繰り返すが、土を測定すればまだまだ安全だと言い切れる数値ではない地域があることはほとんど取り上げられない。
　世界では事故を起こしていない原発の廃炉さえ進んでいないのだ。
　ましてや事故を起こした原発の廃炉が数十年で終わるものではないだろう。
　耳に心地よい言葉はテレビから聞こえてくるけれど、人々の内部被曝や甲状腺がんの話は聞こえなくなった。
　きれいな施設ができてもコミュニティは戻ってこない。
　避難した人々への支援は縮小し、コミュニティが破壊されたままなのに不完全な除染作業をしただけで住民に帰還できると言い、政府は原発事故の被害を無いものにしようとしているのがわかる。

　政府はCO2削減のために原発再稼働は必要だと言い、新しい小型原発の開発も進めると語る。
　使用済み核燃料の処分方法は何も解決していないというのに。
　トイレのないマンションと言われる原発の問題点はずっと解決を見ることはない。
　使用済み核燃料の安全な処分方法は確立されず、行き場もなく原発施設内のプールで冷やし続けている。
　稼働していなくても原発が危険だと言われる所以だ。
　核燃料リサイクルのための再処理工場は、さらに多くの放射性物質を環境中に放出する。
　原発事故が起きないという保証もない。
　CO2削減のため、ゼロカーボンのためと原発推進に舵を切ろうとしているが、騙されてはいけないと強く思う。

　311後から発令されたままの原子力緊急事態宣言下の日本。
　311以前なら100ベクレル/kg以上の物は黄色いバケツに入れて厳重に管理されていた。それがいまではすっかり100ベクレル/kgは安全な食品基準になってしまった。（H２４年４月１日～）
私たちは日々、それを受け入れ続けるしかない。大人も子どもも。

　再び思う。
　原発事故から丸11年、私たちは原発事故から何を学んだだろうか？
　誰かが言い続けなければ原発事故は忘れ去られてしまう。過去の出来事にされてしまう。
　原発事故は終わってはいない。
　そして地震大国日本では原発は絶対選んではいけないエネルギーなのだと、地震の度に思い起こされる。
　福島で起きたことは日本のどこでも起きる。
　原子力発電の対案は「原発は必要ない」ということだけ。

宇宙から地球を見たら、ひときわ明るく輝く日本列島。
電力は足りているという事実を多くの人に知っていただきたい。

レベル７の原発事故が起きたら、、故郷も生活も命も奪われる可能性は常に潜む。
いますぐ全ての原発を廃炉の方向で進めてほしいと切に願う。
いまならまだ間に合う。
311 の悲劇を繰り返さないために。

（津村知恵子）

＜編集後記を兼ねて＞

チェルノブイリ原発事故1986年4月26日～今年で36年になります。

昨年の５月に奈良の鳥越ゆり子さんからレターバックで送られてきた「永瀬清子ノート６」には１９８６年の４月２７日に永瀬清子さんが奈良八百屋「ろ」での詩の朗読会を開催した時の様子が書かれています。

詩の朗読会に私が参加したかの確認でもありました。私は朗読会に参加するのは忙しかったのでお断りしていたのは覚えていたのと、永瀬清子さんが詩の朗読会の後で、鳥越ゆり子さん宅に泊まるからぜひ来るようにとの要請があったので、鳥越ゆり子宅に夕方行って、永瀬清子さんと鳥越ゆり子さんと３人で川の字に寝たのも何となく覚えていたのですが、初めて紹介していただいた岡山県の永瀬清子さんのことが一切思い出せないのでした。私がチェルノブイリ原発事故の次の日に奈良にいたことがこの「永瀬清子ノート６」で初めて気が付いたのです。

それで私が NHK の朝のニュースでチェルノブイリ原発事故を知ったのがいつだったかを調べると「４月２９日」でした。奈良から帰って翌日の朝一番のニュースでゴルバチョフ首相が「核戦争の後を経験してしまった」と述べているのを聞いて、その時の驚きと戸惑い。チェルノブイリという名を一回聞いただけでは覚えられなかったことなど。前日の奈良での出来事はすっかり抜けてしまって３５年経っていたのです。
私はその当時は和文タイプライターを使っていました。一般にはまだパソコンが使われていなくて、ワープロそしてパソコンと移行しましたが私なんかはその動きについてゆくのが大変だった、今もそうです。
遅まきながら私が和文タイプライターを習ってまでやりたかったことをこの機会に整理したい。と思うようになりました。

（松浦雅代）

＜後記＞

コロナ感染がすごい勢いで増加しています。皆さん気を付けて下さい。
行動が制限されると運動不足やストレスが溜まらないように気を付けましょう。

今回の原稿は早い人で１２月に送ってくれた方もありましたが編集の都合により発行を遅らせました。皆さんご協力ありがとうございました。
今後の会に対する提案や今回出した冊子についてもご意見をお聞かせ下さい。

「福島第一原発事故の被ばくで甲状腺がんに」と主張　事故当時子どもだった６人が東電を１月２７日に提訴。１９日の新聞記事です。（別紙）

「子供たちの未来と被ばくを考える会」では会員を募集しています。年会費２０００円です。